

博多港の「みなと文化」

榎田 裕一

目 次

第1章 博多港の整備と利用の沿革	99-1
1. 古代（1）…大陸との交流を示す金印の時代	99-1
2. 古代（2）…大宰府の設置と鴻臚館の盛衰	99-1
3. 古代から中世へ…「袖の湊」の構築	99-2
4. 鎌倉時代…蒙古襲来	99-2
5. 室町時代から戦国時代…戦国武将達の攻防	99-2
6. 安土桃山時代…博多豪商の台頭	99-3
7. 江戸時代…五ヶ浦廻船の活躍	99-3
8. 明治から大正、昭和の時代…テイクオフとその後の成長	99-3
9. 第二次大戦後から平成の時代…その復興と発展、さらに未来へ	99-4
第2章 「みなと文化」の要素別概要	99-5
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」	99-5
（1）宗教	99-5
（2）文芸	99-7
（3）伝説と物語	99-9
2. 交易による流通市場の形成に貢献し、「みなと文化」を育てた人々	99-10
（1）平清盛・重盛	99-10
（2）謝国明	99-10
（3）豊臣秀吉と博多の三傑	99-11
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」	99-11
（1）博多から始まった食文化	99-11
（2）博多で生まれた食文化	99-12
（3）博多の伝統工芸品	99-12
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」	99-13
（1）祭り	99-13
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」	99-14
（1）博多港周辺に立つ記念碑、石碑	99-14
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動きと今後の課題	99-16
1. 港湾遺跡「鴻臚館」の発掘調査と復元計画	99-16
2. 博多塀や元寇防塁の保存	99-16
3. 博多町家の保存	99-16
4. 博多港の開発整備と今後の課題	99-17

所在地：福岡県福岡市

港の種類：港湾

港格：特定重要港湾



【位置図】



【現況写真】(博多港湾・空港整備事務所)

第1章 博多港の整備と利用の沿革

1. 古代（1）・・・大陸との交流を示す金印の時代

博多港は、太古の昔から大陸への玄関口として、重要な役割を果たしてきた。縄文時代の人々は、気候の温暖化とともに、狩猟、採集に加え、魚介類を求めて積極的に海へ進出していった。博多湾内の今津地区から発見された数箇所の貝塚はこの事を物語っている。また、博多湾に近い糸島半島から古代準構造船の部材が発見された。これは、船の製作技術や航海術の向上、それによる各地との活発な交流の始まりであった。そして、時の経過とともに、縄文の人々は新しい文化を求め、アジアの海へと進出していった。やがて、弥生時代に入り、中国大陸との交流が本格化するにつれて、福岡地方に水田稲作や金属器などの技術が伝わった。福岡空港近くにある板付遺跡は、日本で最初にアジアから水田稲作技術が伝わったところと推定されている。

また、博多湾の北側、海の中道の先端に位置する志賀島は、江戸時代半ばの1784年、金印が出土した地として有名である。金印とは、西暦57年、後漢の光武帝がわが国からの朝貢の見返りに、当時この地方にあったクニ「奴国」の王に贈った金の印である。中国の史書「後漢書・東夷伝・倭人条」によると、「建武中元二年、倭奴国、貢を奉り、光武、賜うに印綬をもってす」とある。現在、この金印「漢委奴国王^{かんのわのなのこくおう}」は国宝として、福岡市博物館に展示されている。これは、2000年を超える昔、博多港が大陸との交流の窓口であったことを示す確かな証しに他ならない。



【金印】

(福岡市博物館所蔵)

2. 古代（2）・・・大宰府の設置と鴻臚館の盛衰

奈良盆地にヤマト政権が成立すると、536年、朝廷は対外交流の要として、筑紫の地に「那津官家^{なのつのみやけ}」と称する出先の役所を設置した。これが大宰府の前身と言われている。その後、大宰府が置かれると、その組織の一環として、筑紫館^{つくしのむろつみ}が置かれ、近隣の国々の外交使

節をもてなす迎賓館となった。また、国内から遣唐使や遣新羅使を送り出す場としての機能も果たした。それと同時に、官営の貿易商館でもあった様だ。平安時代に入り、この施設は中国の外交施設である鴻臚寺にならって、鴻臚館の名称で呼ばれるようになり、894年、遣唐使が廃止された後は、次第にその機能が変わり、やがて唐や新羅の貿易商人たちも沢山やってきてその宿舎となり、外交施設から民間の交易施設として、その機能を変えていった。とにかく、7世紀から11世紀前半までの長きにわたり、この鴻臚館は対外交渉窓口として重要な役割を果たした。この当時、鴻臚館は平安京や難波にもあったようだが、所在地がはっきりしているのは、筑紫の鴻臚館だけで、博多湾にのぞむその跡地について1988年から発掘調査が始まり、現在も続いている。跡地からは中国陶磁器や古代瓦などが多数出土し、国際港湾都市福岡の原点を感じることができる。

3. 古代から中世へ…「袖の湊」の構築

平治の乱以後、平家全盛時代となり、父忠盛の後を継いだ平清盛は、対宋貿易拡大を狙って博多に進出、1161年、博多湾にわが国初の人工港「袖の湊」を構築し、日宋貿易で巨満の富を築いた。こうして、平安後期には、この日宋貿易の隆盛によって、博多の町は大いに発展し、海外の商人たちも多く訪れるようになった。

福岡藩の学者、貝原益軒は筑前国続風土記において「博多の町を東西に貫通する入海があり、その形が袖に似ているところから、袖の湊と称され、中国との貿易が盛んに行われた」と記している。鎌倉時代になると、宋の商人達は貿易を活発にするため、次第に博多の町に住み着くようになり、その居留地は「博多津唐房」、のちに大唐街とよばれるチャイナタウンをつくった。これが日本最初のチャイナタウンといわれている。このような中国人の居住区は13世紀後半の蒙古襲来まで約200年間にわたり博多の町に存在し、「博多網首」とよばれる貿易船のオーナーで航海と交易を取り仕切る中国人たちが、大いに活躍し、博多の町の発展にも大きく貢献した。

4. 鎌倉時代…蒙古襲来

鎌倉時代といえば、最大の出来事、蒙古襲来つまり元寇を忘れることはできない。博多湾一帯がその戦場となった。1274年の文永の役では、蒙古軍は博多の町に上陸し、日本軍は劣勢に立たされたので、鎌倉幕府は再度の襲来に備え、博多湾沿岸20kmにわたり、元寇防塁とよばれる石築地を築いた。1281年の弘安の役では、これが大いに功を奏したと言われている。絵巻物「蒙古襲来絵詞」に見られる通り、御家人達の奮闘と神風と呼ばれる大暴風雨によって、わが国の勝利に終わったことは周知の通りである。



【元寇防塁】

(写真提供：福岡市)

5. 室町時代から戦国時代…戦国武将達の攻防

元寇の後、倭寇と呼ばれる無法者達が、朝鮮や中国沿岸で金品を奪うなど、跳梁ばっこを続けたので、明や朝鮮は室町幕府に対し、その取締りを強く要請してきた。それを受け

て、幕府は勘合貿易という政府公認のライセンスによる貿易を制度化した。その結果、博多港は対明、対朝鮮貿易基地として大いに栄えた。この貿易による膨大な利益が室町幕府を潤し、京都における北山文化、東山文化へとつながっていった。やがて時が流れ、時代は群雄割拠の戦国時代へと移っていった。

この時代になると、博多の町は、貿易による多大な利益をもたらす魅力的な土地柄だったので、その利権をめぐる戦国武将達の勢力争いが始まった。すなわち、大内、毛利、大友、龍造寺、島津など有力な戦国大名達が博多を舞台に激しく戦い、その結果町は焦土と化した。いわゆる筑前戦国争乱である。これを復興させたのが、九州平定のため博多入りした豊臣秀吉だった。この時の戦災復興計画を「太閤町割り」といって、現在の博多の市街地形成のベースとなったのであった。

6. 安土桃山時代…博多豪商の台頭

戦国時代末期から江戸時代初期にかけて活躍した博多の豪商とは、神屋宗湛、嶋井宗室、大賀宗九の三人のことで、博多の三傑という。この内、神屋宗湛と嶋井宗室は、茶の湯を通して、秀吉と親しく交わり、博多の再興を願い出て、互いに協力し、1587年、「太閤町割り」（都市復興計画）を成功させた。この時、「流れ」と呼ばれる通り沿いに、7つの区制を敷いた。また、秀吉は博多商人に大幅な自治の権限を与え、これによって博多の町は再び活気を取り戻した。これらの豪商は、朝鮮、ルソン、ジャワなどと盛んに交易し巨万の富を築いていった。

神屋宗湛は、祖父が石見銀山を開発したことで有名だが、秀吉の朝鮮出兵の際、兵糧米の集荷、輸送に協力した。少し時代は下るが、大賀宗九はその子宗伯とともに、黒田長政らとともに中津から福岡入りし、たびたび南方に渡航し、活発に貿易に取り組んだ事で知られている。

7. 江戸時代…五ヶ浦廻船の活躍

江戸時代になると、徳川幕府の鎖国政策によって、海外への門戸は閉ざされ、博多港は対外貿易港としては長い眠りの時代に入った。しかし、この時代は、古代から中世にかけて大きな繁栄をもたらした海外貿易に変わり、五ヶ浦廻船による内航海運の時代となった。博多湾内の能古、今津、浜崎、宮浦、唐泊の五ヶ浦を基地として、千石船が全国を股にかけ活躍した。時あたかもこの頃、伊勢の豪商「河村瑞軒」によって、日本列島を回航する商品流通網が整備され、全国的に廻船業が発展した時期に当たる。しかし、19世紀以降、多くの遭難事故や他国廻船との競争も激化し、幕府の保護も失って幕末以後急速に衰退した。

8. 明治から大正、昭和の時代…テイクオフとその後の成長

博多港は明治32年、関税法に基づき、正式に国際貿易港として開港にこぎつけた。しかし、博多の町は、臘や油など地域特産物以外これといった産業がなく、したがって貨物の収集が意のままにならず、博多港はしばらく港としての発展から取り残されてしまう。それでも、地元経済界の要人達は博多港の発展を目指し、九州沖縄八県連合共進会の開催や港湾整備を積極的に推進した。対外貿易は朝鮮や中国などの近隣諸国を相手として、主

に石炭、臘、硫黄、油などの貨物を取り扱った。その結果、明治、大正、昭和にかけての博多港は多少の紆余曲折はあったものの、相次ぐ港湾開発とともに、質・量ともに右肩上がりの成長を続けていった。

9. 第二次大戦後から平成の時代…その復興と発展、さらに未来へ

終戦後、昭和 22 年までは、博多港は、引き揚げ援護港として、海外からの引き揚げ者 139 万人を受け入れた。その後、戦後復興の時代を経て、1950 年代後半からの高度成長の波に乗り、ますます成長を続け、九州における経済の福岡一極集中と相俟って、西日本一大きな港となった。平成 2 年、特定重要港湾の指定をうけ、平成 19 年度には 74 万 TEU を超える国際海上コンテナを取扱い、また、84 万人超の外国航路、特に韓国航路の船舶乗降客が博多港を利用した。また、平成 20 年には中国からクルーズ客船が 20 数回にわたり博多港に寄港し、利用客はさらに増加した。開港以来概ね 110 年を経過し、博多港は「海に開かれたアジアの拠点都市…福岡」のゲートウェイとして、ますます重要な役割を果たしつつある。



【昭和 32 年頃の博多船溜】

(写真提供：福岡市)

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

(1) 宗教

①博多湾を取り巻く神々

1) 志賀海神社

この神社は玄界灘に臨む交通の要衝、博多港の北にある志賀島の丘上に鎮座し、古来海の守護神、博多湾の総鎮守として、厚く信仰されてきた。創建は明らかではないが、ご祭神は綿津見三神で、龍の都、海神の総本社として、代々、海人の安曇族によって奉祭されている。御神徳は海上安全、水難厄除け、除災招福などとなっている。社伝では、神功皇后伝説を多く残し、元寇の際に御神威を顕示されたことから、社格も高く「延喜式」では明神大社、大正15年には官幣小社になった。

2) 香椎宮

このお宮は724年の創建とされ、皇室との関係が深く、14代仲哀天皇、神功皇后、住吉3神を祭っている。神功皇后は仲哀天皇のお后といわれ、天皇の死後、その遺志を継ぎ、身重の体で博多港から新羅に出兵、無事帰還し、同天皇の廟を建てたのがこの神社の始まりといわれている。

なお、神功皇后に関する伝承は、北部九州至る所に残っており、その箇所は数千箇所にも及ぶといわれている。博多湾の奥の方には、海中に鳥居が立っている。これは御島神社といって、香椎宮の分社でやはり神功皇后が新羅出兵に際し、男髪を結われた所という伝承が残っている。

3) 筥崎宮

日本三大八幡宮の一つといわれ、八幡神の託宣により、921年に創建された。筥崎の地は海にのぞみ大陸に近く、古くから文化の開けた地であり、海外貿易への門戸、護国の要衝でもあったので、筑豊の内陸部にあった大分宮から遷座されたといわれている。筥崎宮記によると「北は巨海に臨み、西は絶域に向かい、異国の来寇を防がんとため、跡をこの地に垂れ、潮汐の声、常に宮中に満ち……」とある。ご祭神は応神天皇、神功皇后、玉依姫命で、国の守護神として今も多数の参詣者が訪れている。蒙古襲来に際しては、ここが前線基地となり、文永の役(1274)の翌年、龜山上皇は「敵国降伏」のご宸翰を下賜された。また、豊臣秀吉の朝鮮出兵に際しては、ここが兵站基地となった。

4) 櫛田神社

櫛田神社は博多の総鎮守といわれている。757年の創建で、天照大神、大幡主命、須佐大神、三神を祭っている。町中であって商売繁昌、不老長寿の「お櫛田様」として博多の人々の信仰を集めているが、港との関係は、平清盛が平家の博多進出を図って肥前神埼の庄の米を上納するため博多に「袖の湊」を開き、倉庫を設置、その海の護り神として佐賀県の神埼の櫛田宮を勧請したと伝えられている。また、博多ふ頭には「櫛田神社浜宮」という小さな分社があり、博多祇園山笠の際、ここで神事が行われる。境内は博多の歴史を物語る事が詰まっており、たとえば蒙古軍船の碇石、霊水「鶴の井戸」、嶋井宗室館跡の博多塀などがある。

5) 住吉神社

当神社は全国 2,000 社を越える住吉神社のなかでも、筑前一の宮として、その創建は非常に古く、平安時代以降、朝野の厚い崇敬を受けてきた。本殿のご祭神は筒男三神で、そのご出現が、いざなぎの大神の海中でのみそぎばらいに関わることから、祓いの神として、航海安全、船舶守護など港の守護神として海運、漁業者の信仰が厚く、「住吉丸」と名付けられた船が多いのもここに由来している。現在の位置は町の中となっているが、鎌倉時代の博多古地図を見ると、那珂川の出口の冷泉津の岬あたりにあり、海に接して建てられていた事がわかる。神功皇后の三韓ご渡航に際し、ご神徳を発揮されたという言い伝えが残っている。

このように博多湾沿岸には多くの神社があるが、これまさに、貝原益軒が「筑前国続風土記」で言っているように、博多港周辺の海は神々の出現し賜う聖地であるという事ができる。つまり、博多湾には長い歴史のなかで、海を介して運び伝えられ、地域の人々によって育てられてきた信仰が集積していると言うことが出来る。

②博多に根付いた仏教文化

1) 博多禅の展開（聖福寺、承天寺、崇福寺、妙楽寺）

鎌倉時代初期、博多では多くの禅寺が開創された。それは宋へ勉強に行った禅僧達が帰国後、まず博多港に上陸し、博多の地で真っ先にお寺を建てたからである。

聖福寺はその扁額が示す通り「扶桑最初禅窟」つまり日本最初の禅寺で、1195 年、栄西禅師によって建てられた。その後、栄西禅師は、数年間博多にとどまり、臨済禅の布教に努めた。1199 年、禅師は「興禅護国論」を著し、博多を皮切りに鎌倉、京都へと移動し、鎌倉の寿福寺、京都の建仁寺の開山に取り組み、禅の教えを全国へ広めていった高僧である。また、栄西禅師は宋風の喫茶法を伝えて「喫茶養生記」を著し、茶祖としても知られている。現在この寺は臨済宗妙心寺派の寺となっている。

承天寺は聖福寺から約半世紀遅れて、円爾弁円こと聖一国師によって建てられた。すなわち、1241 年、宋から帰国後、まず、国師は博多の地に臨済宗の寺を開山したのだが、ちょうどその頃、博多の町に疫病が流行し、民衆が困っていたので、同国師が施餓飢棚に乗って、聖水を撒き、疫病退散を祈ったのが、博多山笠の起こりといわれている。また、国師は宋からの帰国の途中、しげに襲われたが、八幡大菩薩の加護によって無事帰国できたとの逸話が残っており、この由来により、毎年この寺の禅僧による筥崎八幡宮へのお礼参りが行われている。聖一国師は、承天寺開山から 2 年後には招かれて京都へ上り、東福寺の開山にも取り組んだ。現在は臨済宗東福寺派の寺である。



【承天寺】

(写真提供：福岡市)

崇福寺も由緒ある禅寺である。当初は 1240 年、太宰府の地に、聖一国師によって開堂演法された禅刹で、1268 年、宋から博多に帰国した鎌倉建長寺開山大覚禅師の弟子大應国師が、法条家の命により筑前に赴任し、1272 年この寺の住持となった。大應国師は、ここに 33 年間在住し、多くの弟子を育てた。その中に、京都大徳寺の開山、大燈国師や、博多妙

楽寺の月堂宗規和尚などすぐれた門下を輩出した。1586年、太宰府にあったこの寺は島津、大友の戦いで焼失したが、黒田長政の福岡入国の際、太宰府から福岡市博多区千代に移転、現在、臨済宗大徳寺派の寺として、黒田家の菩提寺となっている。

妙楽寺も1316年に創建された臨済宗大徳寺派の寺である。当初は博多湾岸に近い所にあって、みずから中国との貿易にも携わっていたという。また、寺の境内から海を見渡すところに、呑碧楼^{どんぺきろう}という楼閣を建て、そのすばらしい景観は海外にも知れ渡ったといわれている。1586年、兵火にかかり焼失、やや内陸に入った現在地に移転しているが、この寺には和尚を慕って何人かの中国人がやってきた。そのなかの一人、陳延祐^{ちんえんゆう}という人が透頂香（とうちんこう）という薬を作り、これが後の菓子「ういろう」となったので、境内には「ういろう伝来の地」の碑が建っている。また博多商人ゆかりの寺として、神屋宗湛はか何人かの博多豪商の墓がある。

2) 真言密教の伝来（東長寺）

弘法大師空海は806年、唐での2年間の修行の後博多に上陸、最初は船宿を買い取って、唐から持ち帰った仏像、経本、仏具を収納すると同時に、早速一寺を建立した。その後、現在地に移転したが、それが、現在の南岳山東長寺の始まりである。真言密教が東へ長く伝わるようにとの願いを込めて東長寺と名付けられた。つまり、この寺は密教東漸のためのわが国最初の霊場といわれており、空海が開山した日本最初の寺である。その後、弘法大師空海は2年程、九州に留まって各地で布教、その後、許しを得て、816年に高野山にて金剛峯寺を創建、さらに、823年、京都にて東寺を開創した。平成18年には開創1200年を迎えた古刹であり、九州88ヶ所霊場めぐりの一番札所ともなっている。

3) 人魚伝説の竜宮寺

これも港町ならではの物語である。1222年のある時、博多の浜に人魚が網にかかったという。早速その事を朝廷に奏上すると、占い師がいうには、それは国家繁栄の兆しである。そこで、朝廷は勅使として「冷泉中納言」を博多に派遣した。しかし、勅使が着いたときには人魚はすでに死亡、そこで博多湾海辺近くにあった竜宮寺の旧名称「浮御堂」のそばに埋葬、その墓は人魚塚と名付けられた。その時から博多の津は勅使の名をとり、冷泉の津（現在の冷泉町）と呼ばれるようになったという。また、人魚は竜宮の使いで長生きするとの噂が広がり、人々はその塚石を欠いてのんだという。現在、この寺は浄土宗の寺となっているが、寺宝として人魚の骨と人魚を描いた掛け軸が保管されている。

(2) 文芸

①博多港周辺の万葉の歌

4,500首にもものぼる歌を集めた万葉集は形式、内容とも多岐にわたっているが、博多湾に浮かぶ島々についても多くの歌が残されている。金印出土の島、志賀島について23首が歌われているが、その内訳は、山上憶良の海人の歌10首、旅の歌4首、遺新羅使の歌4首、塩に関する歌4首などである。能古島に関しても奈良時代の防人に関する歌が3首ほどある。

多くの歌は近年、歌碑が整備され、歌碑めぐりをすることができるが、その一二を紹介してみよう。

志賀島1号碑「ちはやぶる 鐘の岬を 過ぎぬとも われは忘れじ 志賀の皇神」

その意味は「恐ろしい航海の難所である鐘の岬を無事過ぎたとしても、志賀の海神のお陰を忘れません」という意味である。

能古島の防人の歌「唐泊 能古の浦波たたぬ日は あれども家に恋いぬ日はなし」

その意味は「唐泊の方向を見ると、能古の浦には、白波がたたない穏やかな日はあるけれども、遠くに残した家を恋しく思わない日はありません」という事である。

防人には東北や関東の出身者が多く、多くは故郷に妻子を残し、明日おも知れぬ我が身を憂い、故郷への思いを詠んだのであった。

また、かつての九州大学教授で優れた考古学者でもあった中山平次郎博士は、次の万葉の歌により、鴻臚館の所在地をつきとめ、大正 15 年から昭和 2 年にかけて、考古学雑誌に発表された。

「志賀の海人の一日もおちず焼く塩の からき恋も吾はするかも」

「今よりは秋づきぬらしあしひきの 山松かげにひぐらし鳴きぬ」

「神さぶる荒津の崎に寄する波間 無くや妹に恋い渡りなむ」

この万葉の歌 3 句から考えると、志賀島が見え、潮の音が聞こえ、裏の松山に蝉かせ鳴く場所はここしかないと考えられ、現在発掘調査が進む旧平和台球場跡地を鴻臚館のあった場所として特定されたのであった。

②連歌師「飯尾宗祇」と博多百韻

1467 年に始まった応仁の乱のあと、連歌師「飯尾宗祇」は大内氏に招かれ、1480 年、九州路を回遊した。同年 9 月、博多へ下ってきた彼は、先に述べた浄土宗竜宮寺を宿として、志賀島、住吉神社、生の松原など博多湾沿岸の景勝地に遊んだのち、これを題材として、この寺において、連歌「博多百韻」を興行したと言われている。

この時の宗祇の発句は

秋更けぬ松のはかたの沖津風（宗祇）

続いて

霧にしぐるる波の寒けさ（空吟…竜宮寺住職）

と歌っている。あと 10 人練衆が次々と続いた。

当時、この寺は「浮御堂」と呼ばれ博多湾の浜辺にあったようで、そこに宿泊した彼は、そこから見える博多湾の景観を、紀行文「筑紫道記」の中で次のように記している。

「明けぬればこの所のさまを見待るに、前に入り海はるかにして、志賀の島を見渡して、沖には大船おおくかかれり。もろこし人もや乗りけんと思ゆ。左にはそれとなき山どもかさなり、右は箱崎の松原遠く連なり、仏閣僧坊数もしらず、人民の上下門をならべ軒をあらそいて、その境四方にひろし。」

これを読むと、室町時代の博多湾の美しい景色が彷彿として目に浮かぶ様だ。

③唐船塔

筥崎八幡宮の境内に唐船塔という石碑が立っている。これにまつわる物語は次の通りである。昔、唐の祖慶という人が捕らわれ、箱崎殿に仕えていた。この人には祖国に二人の子供がいたが、子供達は父親があまりにも長く帰国しないので、すでに死亡したものと思ひ込み、供養のため 1 基の石塔をもって博多の津にやってきた。ところが、来てみると、父親が無事元気に暮らしていたので、再会を喜び、親子一緒に帰国したという。その時持ってきたのが、この塔と伝えられている。謡曲「唐船」はこれが舞台となっている。

④浄瑠璃「博多小女郎波枕」

伊藤小左衛門は江戸時代の博多の豪商の一人で貿易により財をなし、黒田藩の財政にも大きく寄与したようである。しかし、幕府の鎖国政策の禁を犯し、密貿易が発覚、その罪で子供も含め家族全員が処刑された。博多の人々が不憫に思い、子供の名をとって後日、万四郎神社を建てた。また長崎の遊女、貞歌は心から小左衛門を慕い、博多まで追って来たが、着いた時には処刑後の事であったので、彼女は深く嘆き悲しみ、後を追って自殺したという。

近松門左衛門はこの話にヒントを得て、世話物浄瑠璃「博多小女郎波枕」を作り、大阪竹本座で上演しヒットしたといわれている。

⑤五足の靴の博多来遊

明治40年夏、与謝野鉄幹をリーダーとする若き5人の文人達が博多を振出しに、九州を巡遊した。その後、その紀行文が「五足の靴」として東京の新聞に掲載された。

メンバーは彼のほか、北原白秋、木下杢太郎、吉井勇、平野万里で、彼等は明治の文壇に大きな足跡を残した。この旅行が、日本におけるキリシタン文化の発見を通して、後日の南蛮文学発展のきっかけになったと言われている。

博多では、まず一行は西公園の料亭で夕食を共にした後、船で博多湾を横切り、中洲の川丈で宿をとったが、小船で夜の博多湾を進む時の情景が次のように描写されている。

「空には天の川が白い。海には暗い波に折々夜光虫とくらげが光る。舟中の話しは尽く
ることを知らぬ。博多なるかな……」

と道中博多論議に花を咲かせたようである。

翌日は汽車に乗って博多湾に広がる砂丘「海の中道」に遊んだ。その様子を次のように述べている。

「朝、汽車は千代の松原を走る。松緑にして砂白き古来の絶景である。この中に、管崎八幡、香椎の宮がある。潮風の荒きに圧され、まつ皆低く地を這い、砂は黄味を帯びた白色の石英質である。投げられた松の影が虎斑を作る中をめまぐるしく走っていく。…」

「この辺りから、海の中道が始まる。玄界灘と博多湾とを境し、長さ3里にわたる砂丘の連続である。自然は意匠に富む。砂の壁は限りなくひだをつくり、長く続いてあくことを知らぬ。白い砂が白く光って人の目をくらます。…」

これを読むと明治末期の博多湾沿岸の情景が目に浮かぶようである。

現在、この五足の靴を記念して、元川丈旅館の前に「旅籠屋の、名を川丈と、いいしこと、ふとおもいでて、むかし恋しむ」という石碑が立っている。

(3) 伝説と物語

①人魚の漂着

先に、人魚伝説の竜宮寺について述べたが、童話「浦島太郎」にみられるように、深海の底にあって龍神が住むという竜宮城への憧れとその使いとしての人魚が、当時の人々の信仰の対象となり、この伝説に結び付いたのではないかと思われる。

②孫七漂流記

江戸時代、博多湾一帯は海運集団、筑前五か浦廻船の基地として栄えた。しかし、数多

くの遭難事故が発生し、17世紀後半から、徐々に衰えていった。その遭難事故にまつわるドラマが孫七漂流記である。

孫七は、1763年「伊勢丸」に20人の仲間とともに乗り組み、鹿島灘で遭難、百数十日の漂流の末、ただ一人生き残り、8年後に長崎に帰国した船乗りである。

漂流先はフィリピン、ブルネイ、インドネシアなどに跨がり、現地で波乱の人生を送った後、最後はオランダ船に乗せられて、鎖国とキリシタン禁制の母国に辿り着いたという浦島太郎のようなお話しである。帰国後、長崎奉行所に呼び出され、厳しい取り調べを受け、不遇な晩年を送ったようである。そして、幾つかの漂流記を残しているのが、これは実際にあった話と思われる。

③白うさぎと大応国師

博多崇福寺を開山した大応国師は、宋の国で無事修行が終わり、日本に帰国するため船に乗った。乗船の直前、狼に追われている白兎を助けてやったところ、その兎が国師の側を離れようとしないので、国師は懐に兎を入れて出発した。最初は静かな船出であったが、玄界灘にさしかかった時激しい暴風雨となり、船は難破しそうになったという。その時、兎が海に飛び込み、その跡に平らな海路が開け、船は安全に進む事ができ、国師は無事博多港へ着くことができたという話である。

2. 交易による流通市場の形成に貢献し、「みなと文化」を育てた人々

(1) 平清盛・重盛

平安時代後期、一世を風靡した清盛・重盛親子は博多周辺にも大きな事跡を残した。

まず、「袖の湊」の構築である。清盛は、日宋貿易のため、博多に、わが国初の人工港を造り、貿易の基盤を固めた。今でいう港湾開発、インフラ整備にあたる。二人は、自ら貿易に取り組み、政権の基盤を固めるとともに、巨万の富を独占した。同時に、その財力をバックに、博多の町の政治や経済的發展にも大きく寄与した。また、筑後、肥前の穀倉地帯を領有し、その穀物の京への積み出し港として、博多港を大いに利用したので、この二人はいまもって博多の恩人といわれている。



「袖の湊」

(資料提供：筑前國一之宮住吉神社)

(2) 謝国明

彼は鎌倉時代初期、博多と宋を結び付けた華僑のリーダーである。彼は日宋貿易を取り仕切るため博多に居を構え、後に日本人の女性と結婚し帰化、名前を「網首謝太郎国明」と変えた。僧円爾弁円を資金的に助けて博多に承天寺を建立、母国宋の仏教、臨済禅の普及と援助にも務めた。ある年の年末、博多の町衆にそばの作り方、食べ方を教え、食べている時、除夜の鐘が鳴ったので、これが翌年からのしきたりとなり、これが開運を願う「年越し蕎麦」の起こりといわれている。謝国明の墓は大きな楠のそばにあったので、大楠様として、今も博多の人々が地域の恩人として大切に祭っている。

（３）豊臣秀吉と博多の三傑

豊臣秀吉は、戦国時代末期の天正 15 年、薩摩の島津義久を降伏させて、全九州を平定し、博多湾近くの箱崎に凱旋、大坂に向けて出発するまで、20 日余り滞在した。その間、博多の三傑と呼ばれる豪商「神屋宗湛」「嶋井宗室」「大賀宗九」らの要望にこたえ、兵火で焦土と化した博多の再興に取り組んだ。まず、石田三成や黒田官兵衛孝高に命じ、廃墟となった町を検分、土地の区画整理を行い、博多商人の協力を得て、博多湾、那珂川、石堂川に挟まれた地域に、南北 4 本、東西 3 本の道路を走らせ、7 流れの区制を敷いた。これを「太閤町割り」と呼んでいる。これにより、博多の町は戦後復興を成し遂げ、活気を取り戻している。博多の夏の祭り、博多山笠は、現在もこの 7 流れの組織を基盤にして行われている。

秀吉没後、神屋宗湛はじめ博多の人々はその恩を忘れず、豊国大明神としてその遺徳を偲び、「豊国神社」を建てた。

神屋宗湛は先にも述べたが、博多生まれの貿易商で朝鮮と交易して財を成し、秀吉の茶友でもあった。

嶋井宗室も博多商人の家に生まれ、ルソン、ジャワと交易した。宗湛とも交友があり、また大友宗麟を通し、堺の商人とも親交を持ち、茶や禅に精通して、信長や秀吉に可愛がられたようである。本能寺の変に際し、弘法大師直筆の「一切経千字文」を持ち出し、博多の東長寺に納めたことでも知られている。

大賀宗九は大友家の家臣であったが、黒田長政の福岡入りとともに、博多に移り住み、三男宗伯とともに手広く海外貿易を行い、巨万の富を築いた。

3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

（１）博多から始まった食文化

①お茶

博多に聖福寺を開山した栄西は、宋から茶の種子を持ち帰り、佐賀県の脊振山靈仙寺内石上坊の庭に植えたといわれている。これが、石上茶^{いわがみちが}である。同時に、聖福寺境内にも植え、著者「喫茶養生記」を著し、薬用として広く伝授したため、鎌倉時代以降、お茶が日本各地で栽培されるようになった。したがって、栄西は茶祖といわれ、その後の日本の茶の文化の発展に大きく貢献した。

②蕎麦、うどん、まんじゅう

承天寺を開山した聖一国師は、宋から帰朝する時、水車と歯車と石臼が連動して粉を挽く「水磨^{すいま}の図」と呼ばれる図面を持ち帰った。これが、日本で粉食文化を広げるきっかけとなり、蕎麦、うどん、まんじゅうといった大陸の文化が博多を皮切りに国内に普及していった。また、聖一国師は博多の町を托鉢の途中、ある茶店の手厚いもてなしに感謝し、酒饅頭の作り方を教え、「御饅頭所」の看板を与えた。今もこれに由来する看板が、博多の菓匠「松屋」の店頭飾られている。

③ういろう

博多妙楽寺には、ういろう伝来の地の碑が立っている。これは、鎌倉時代この寺の四世、無方和尚を頼って、来日帰化した陳延祐という人が透頂香^{とうちんこう}という万能薬を作り、足利将軍に献上し、その製法、秘伝^{ういろう}を子孫が継承、外郎と名付けたのが始まりで、本来は薬の名前

であったが、後にお菓子の名前に転じたといわれている。

（２）博多で生まれた食文化

①白魚料理

博多の人は、海に面し一年中新鮮な海の幸に恵まれている。しろうお料理は博多の春を告げる風物詩で、産卵のため博多湾から室見川を、遡ってくるハゼ科の魚（しろうお）でヤナを仕掛けて捕獲し、水盤の中で泳ぐこの魚を金網ですくい、ポン酢とうずらの卵のつけ汁につけて食べる。いわゆる踊り食いで、その後、この魚のてんぷら、卵とじなどしろ魚のフルコースとなる。はかなく、美しく、透明なこの魚は室見川河畔の料亭で春の味として親しまれている。

②おきゅうと

これは博多に伝わる海藻加工食品である。一昔前までは博多の人の朝食には付き物で、毎朝行商人が売り歩いていた。原料は博多の海の産物で、エゴノリと呼ばれる海藻である。これを天日に干して、煮こして固めたもの。鰹節と醤油、それに胡麻や酢を加えて食べる。冷たくて、ツルンと喉を通り、あっさりした食品であるが、最近は原料不足で悩んでいる様だ。

③からしめんたい

博多みやげといえば、まず挙げられるのが、これである。博多が生んだ日本の味となった。スケトウダラの卵を塩と辛子で漬けたもので、戦後、韓国から引き揚げた博多の人が考案した食品である。昭和 50 年、新幹線の博多乗り入れをきっかけに、全国に知られるようになった。

（３）博多の伝統工芸品

①博多織

博多に承天寺を開山した聖一国師は、宋に渡る時、従者として満田弥三右衛門を同行させた。この人は、唐織の技術を学んで帰り、独自の織物を考案し、それが博多の伝統産業の一つ博多織のルーツとなった。後に、黒田長政が、これを幕府への献上品に指定したため、「献上博多」の名が生まれた。

最近、この伝統技術を継承する後継者養成のため、カレッジが設立されている。

②博多鋏

今から 750 年程前、帰化人の謝国明が宋から博多に鋏を持ち帰り、それが唐鋏と呼ばれた。その後、幕末の頃に博多に住む刀鍛冶師の一人が唐鋏の制作に取り組み、それが改良され、弟子に継承されて、切れ味の良い和鋏「博多鋏」が生まれた。

③博多人形

博多人形は博多を代表する伝統工芸品であるが、これも東アジア文化の影響を受けたと考えられている。素焼きの人形を愛でる習慣は鎌倉時代に博多の中国人街や周辺社寺に伝わり、それが黒田長政の筑前入国に伴って多くの職人が集められ、現在の博多人形の素地が出来たといわれている。明治になり、パリなどの国際博覧会にも出品され、高い評価を受け、「博多人形」として世に知られるようになった。

④博多独楽

1300 年程前、中国から子供の遊具として竹製の唐ゴマが伝わり、17 世紀後半、木台に鉄の芯の棒を打ち込んだ博多独楽が作られるようになった。この独楽は作る技術と回す技術、曲芸が三味一体となって受け継がれている。

⑤高取焼

文禄・慶長の役の際、黒田長政が朝鮮半島から陶工「高取八山」を連れ帰り、直方市の鷹取山の麓に開窯させたのが始まりで、その後福岡市西区に移り、現在 15 代味楽氏によって、その伝統が受け継がれている。通好みの渋い色合いが特徴で、酒器、食器など味わい深い作品が作られている。

4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

(1) 祭り

博多は祭り好きの土地柄で一年中いろいろな祭りがある。なかでも、博多三大祭りといわれる「どんたく、山笠、放生会」は全国的にも有名で大きなお祭りである。ここでは、港との関係から地域で育まれてきたものを取り上げる。

①博多どんたく港まつり

毎年 5 月 3 日～4 日に行われる博多の祭りである。発祥は、京都御所の正月宮中参賀の行事といわれ、それが博多に伝わり、正月 15 日に、その年の繁栄を祈って、神の依り代の松を飾り、歳神を迎える民俗行事となり、次第に芸能化したと言われている。一説では、平清盛、重盛親子の善政を偲ぶ追福行事として始まったと言われている。博多では「博多松ばやし」と呼び、「福神、恵比須、大黒の三福神」と「稚児、通りもん」からなる行列が、飾り台を曳き、様々な扮装で歌舞音曲を奏でながら、町を練り歩いた。その後、この行列は 1595 年、小早川秀秋を名島城に祝い、黒田藩政期には博多町人による福岡城表敬となり、明治時代には、軍国主義時代を反映して、招魂祭へと引き継がれた。このように長い歴史を経て、820 年に及ぶ伝統を継承し、戦後「博多どんたく港まつり」、「市民の祭り」として育てられ、定着している。ゴールデンウィークの祭り期間中は、博多港はじめ、市内各所に舞台が設けられ、200 万人を超える人出となり、大きな祭りとなっている。

②博多祇園山笠

これは、毎年 7 月 1 日～15 日にかけて行われる全国的にも有名な博多の夏のお祭りである。また、この祭りは、櫛田神社への奉納神事で、国指定重要無形民俗文化財にも指定されている。その起源については、1241 年博多承天寺の開祖、聖一国師が、疫病を鎮めるため、博多の人々が担ぐ施餓鬼棚に乗って甘露水（祈祷水）を撒いたのが始まりと信じられている。

祭り期間中、豪華絢爛な飾り山が市内あちこちに公開されると同時に、勇壮な 7 つのかき山が水を浴びて町を駆け抜ける。飾り山の静と、かき山の動が、見事に結びついた博多らしいお祭りである。そのクライマックスは、7 月 15 日未明に一番山から順次行われる櫛田入りで、そのときは



【博多祇園山笠】

(写真提供：福岡市)

町中興奮のつぼと化す。

この祭りも港や水と大いに関係があり、まず、6月初旬、博多ふ頭の櫛田神社浜宮（分社）にて、博多湾の海水でかき山の6本のかき棒を洗い清める神事から始まり、7月1日の当番町と7月9日の全流による筥崎浜での「お潮井取り」が行われる。また、お潮井てぼという小さな竹かごにまさごを入れ、玄関に飾って、家を出る時、体に振り掛け、身を清める習慣が当地方に根付いている。さらに、山笠が走るコースでの勢い水も欠かせないものである。

③放生会

この祭りは毎年9月に行われ、筥崎宮のお祭りとして定着している。その趣旨は万物の生命をいつくしみ、殺生を戒めるための神事である。千年以上続く祭りで、言い伝えによると、昔は祭りの間、漁を禁じ、煮物の売買も認めなかったという。また、仏教の教えにしたがって、生き物を池や川に放って供養する儀式も行われたようだ。現在では、生き物の生命を解き放つ意味を込め、鯉と鳩の放生を行っている。

④博多大浜流灌頂

この祭りは、毎年8月24日から3日間博多港に近い大浜公民館の周辺で行われるお祭りである。宝暦6年（1756）から伝わる博多の夏祭りの一つである。その由来は、1755年大風雨により博多湾で難船により、溺死した霊や家屋倒壊で圧死した霊などを施餓鬼供養するため始まったものと言われている。仮設の祭壇を作り、真言宗「東長寺」の僧による読経が執り行われる。期間中立てられる「武者絵大燈籠」は地域の名物となっている。この祭りが終わると博多の夏も終わるといふ。

5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

（1）博多港周辺に立つ記念碑、石碑

記念碑は、その時代の出来事を記念し、それに関係した人物の功績を顕彰するため、立てられたモニュメントである。これは、その時代の社会背景や時代の空気を伝えてくれ、また景観形成のうえで、大きな要素となっている。

①亀山上皇像と日蓮上人像

福岡市内の記念碑で特に有名なのは、博多湾に程近い東公園に立つ亀山上皇像と日蓮上人像を上げることができる。亀山上皇像は地元出身で彫刻界の巨匠、山崎朝雲の作である。日蓮上人銅像は銅製立像としては日本最大で高さ21mに達する。この二つは13世紀後半、博多湾一帯が主戦場となって展開された元寇に因んだものである。明治37年、日露戦争のさなかに完成し、戦前までこの銅像周辺は博多を代表する観光名所となっていた。現在元寇資料館も整備され、市民の憩いの場となっている。

②博多港発祥の地の碑

これは、古より、博多港が、伊勢の洞津、鹿児島^{あきのつ}の房津^{ぼうのつ}とともに、那の津の港として、アジア大陸との交流の窓口として果たしてきた長い歴史とその役割に思いを馳せ、それを記念して当初の位置に立てられたものである。

③引き揚げ記念碑

これは1945年の終戦直後から、博多港が1年5か月にわたり、朝鮮半島や中国東北地区から139万人の日本人引き揚げ者を迎え入れ、同時に在日の朝鮮の人々や中国人などを

50 万人も送り出したことを記念して立てられたものである。

この碑は中央ふ頭イベント広場に屹立している。「那の津往還」と名付けられ、朱色で船の形をしているが、敗戦直後の失意と、その上に沸き上がってきた生への希望を表現したモニュメントとなっている。博多港の歴史の一駒を物語る記念碑である。

④フランク小川の胸像

国際化時代の今日、博多港もアジア、世界に繋がる拠点港湾として発展している。博多港には、姉妹港、友好港、貿易協力港、相互交流港などが数多くあるが、これら港湾同志の交流に先立ち、1962 年福岡市において姉妹都市交流が始まった。これらの中で、一番早かったのがアメリカ・オークランドとの姉妹都市締結であった。すなわち、1962 年 10 月に福岡市とオークランド市は姉妹都市提携を結んだが、その裏に一人の日系人が奔走していた。この人はフランク小川といい、オークランド側の窓口となって交渉と調整にかけずり回り、人並みならぬ情熱と時間を注いだという。その功績を称え、2 体の胸像が制作され、両市に立てられることになった。その一体が博多港中央ふ頭の一隅にたてられている。その後、博多港とオークランド港は 1988 年に貿易協力港となり、今日まで引き続き親密な関係を続けている。



【引き上げ記念碑】
(写真提供：(社)博多港振興協会)

⑤旧町名の保存とその石碑

港町博多には、太閤町割り以来、由緒のある町の名が多く残っていた。ところが、昭和 41 年、市当局によって、都市計画や区画整理に伴う町名、町界の改正が行われ、風情のある町名が消えてしまった。しかし、古い町に愛着を持つ人達が、地域の歴史を色濃く反映したその町名を、なんとか後世に残そうと言う事で、官民協力の上、町のあちこちに旧町名を表示した小さな石碑を立てることになった。そしてその石碑には、その町にちなむいわれなどを記し、地域文化の保存に取り組んでいる。

例えば、昔の魚町は、今は上呉服町となった。ここは、平安末期、袖の湊の南岸で、江戸時代の後期頃まで、浦浦から集められた魚や塩が取引されていたことから魚町と呼ばれていたという。このほか、今では櫛田前町は冷泉町、蓮池町や官内町は中呉服町、浜口町は大部分が昭和通りとなっているが、石碑によって、昔の港町の文化を偲びその保存に取り組んでいるところである。

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動きと今後の課題

1. 港湾遺跡「鴻臚館」の発掘調査と復元計画

飛鳥、奈良、平安時代に、大和朝廷の迎賓館として、あるいは遣唐使の渡唐口として、さらにまた貿易商館として、筑紫の鴻臚館は様々な役割を果たしてきたが、大正15年九州帝国大学医学部教授 中山平次郎博士によって、その所在がつきとめられ、昭和63年から福岡市によってその全容解明を目指し、発掘調査が進められている。なお、現在の位置は、海岸線から約1km離れているが、当時は建物の下がすぐ波打ち際で、館が立つ高台からは博多湾が一望されたと考えられている。この発掘調査もすでに21年目を迎え、現在は、旧平和台球場跡地の北半分を対象とした調査が続けられており、武家屋敷の境界溝や石組み井戸、海側に向か



【鴻臚館】
(写真提供:福岡市)

って落ちる崖、さらに布堀り堀の柱列や東門と思われる柱穴などが確認されている。

鴻臚館の遺構は、この様な発掘調査前はすでに壊滅したと考えられていたが、調査の結果、南北二つの施設があったことと、建物は大きく三時期に分けて建て替えられていったことが判明している。さらに昨年来、国土交通省による「新たな公のコミュニティ創生支援モデル事業」として、古代官道調査が実施され、鴻臚館から水城西門を経由して太宰府にいたる西門ルートが明らかになりつつある。

すでに平成7年、この地に鴻臚館跡展示館がオープンしており、一部の発掘跡の状況や、推定による一部建物を復元模型が展示されている。

しかし、将来は今後さらに進むと思われる発掘調査の成果をふまえて、当時の施設全体をより詳細に復元し、史跡公園として整備する方向で検討されているようである。

2. 博多堀や元寇防塁の保存

博多堀とは、戦国時代博多の町が兵火によって灰塵に帰し、瓦礫の山となったが、その中の焼け瓦や焼け石を集め、土で固めて、独特のデザインを持つ堀を造り上げたものである。博多の貿易商人島井宗室の屋敷跡などに長く放置されていたが、修復の上、現在では櫛田神社境内に一部が再現されている。

元寇防塁も中世博多の歴史を物語る構造物である。長い時の経過とともに、石は崩れ、砂に埋まって歴史の闇に消えつつあったが、近年、保存修復が進み、今津、生の松原、西新など数カ所に史跡として再現され、観光スポットとなっている。

3. 博多町家の保存

博多には、太閤町割りの頃から港町として古い町家が軒を連ねていた。しかし、長い年

月の間に徐々に取り壊され、地域独自の伝統的建築文化が消えていった。これに危機感を抱いた人達が、数少なくなった町家の修理復元に取り組みはじめたのは、平成に入ってからのことであった。

すなわち、平成 7 年、明治の中頃建てられた博多織りの織り元の町家を修理、移転し、歴史体験施設「博多町家ふるさと館」として再現した。展示棟、町家棟、お土産どころの 3 棟から成るが、町家棟の特徴は、間口が狭く、奥行きが深く、通り土間によって、店の間、中の間、奥の間と繋がり、高い吹き抜けや坪庭とともに、趣のある独特の空間を形成している。

博多織のルーツについては、先に述べたように、博多港を通して入ってきた重要な地域産業の一つであり、この町家の中では、定期的にその手織りの実演を行い、保存継承に努めているところである。

4. 博多港の開発整備と今後の課題

博多港では、近年、増大する海上貨物の動きに伴い、ふ頭、倉庫、港湾荷役機械、コンテナターミナルなど物流関連施設の拡大が、主要な港湾景観の変化を形作ってきたが、それと同時に、アメニティー性に富む親水空間「ウォーターフロント」の造成、巨大な港湾インフラ「橋梁」のグッドデザイン化、海に浮かぶ森を目指す「アイランドシティ」の住環境整備など様々な意欲的試みがなされてきた。

博多ふ頭ベイサイドプレイスは博多湾ウォーターフロントとして 1991 年に開発され、ポートタワー、ミュージアム、アクアリウム、洗練された建物、ボードウォークの設置など心地好い雰囲気を持つ水辺空間となっている。都心にも近く、市民の憩いの場でもある。

また、博多湾西部の海浜都市「シーサイドもち」から「マリノアシティ」につながる地域は多数の近代ビルと白い人工海浜のひろがる美しい景観を作り出している。高さ 234m に達する福岡タワー、鈍い砂色の屋根を持つヤフードーム、豪華客船の形をした JAL シーホークホテル&リゾート、数々の高層マンション、一周 20 分で博多湾の大パノラマを展望できる巨大観覧車などが美しい景観を形成している。

次に、博多湾にかかる橋も見逃すことはできない。交通インフラとして、人や車のスムーズな移動に本来の機能を発揮するとともに、ゆるやかなカーブの橋桁を持つアーチ橋「香椎かもめ大橋」と「海の中道大橋」、中央の直立した柱から、左右斜めに伸びる多数のワイヤーを持つ斜張橋「荒津大橋」など、これら構造物が周辺の景色に溶け込んでいる。

さらに、埋立による博多湾に浮かぶ「アイランドシティ」は 21 世紀の新しいモデル都市を目指している。特にこの「アイランドシティ」は、総事業費 4,600 億円に達する福岡市最大のプロジェクトであるが、すでに平成 6 年の事業着手以来 15 年を経過し、全体像が次第に明らかになりつつある。

このプロジェクトは 4 つの目的の下に進められている。その一つは福岡市東部地域の交通体系整備である。すでに香椎パークポート 1 号線、アイランドシティ 1 号線、海の中道アイランド線、香椎アイランド線などの開通により、その目的が達成されている。第 2 の目的「港湾機能の強化」については、すでにアイランドシティ C1 コンテナターミナル（水深 14m）につづき、アイランドシティ C2 コンテナターミナル（水深 15m）の一部も供用が開始され、港湾機能は益々強化されつつある。

第3の目的は「新しい産業の集積拠点の形成」である。この点については現在福祉施設や医療施設の誘致が積極的に進められている。

第4の目的「快適な都市空間の形成」については、住宅地「照葉のまち」が平成17年末にオープンした。自然環境と共生する緑の島の実現を目指し、将来は、一戸建てと集合住宅を合わせ、1,500戸が整備される予定となっている。また島に聳える超高層トリプルタワー・マンション「アイランドタワースカイクラブ」も完成した。ここは、まさに新世紀の未来都市、実験都市なのだ。そのコンセプトは人と自然が輝きあう照葉の町づくりである。照葉とは、照葉樹林文化論という言葉があるように、九州のシンボルであり、日本の原風景として「鎮守の森」に囲まれたような自然豊かな住宅地を目指すものである。

この様に近年の博多港の開発は、東アジアのマルチ・クロス・ポートとして機能の充実を図るとともに、入念な環境アセスメントの下、海域、海岸域の特性に合わせ、①護岸の新設、改良、②養浜、砂浜、樹林、松林の保全、③海底の覆砂、④遊歩道の整備と植栽などの措置を講じ、自然環境と開発の調和による美しい景観、次々に海浜に出現する人工構造物の形や色の工夫を通して、美しい文化的景観ひいては美しい国土の創造に向けて取り組んでいるところである。



【福岡市から博多湾を望む】
(写真提供：福岡市)